

表6 タイワンガザミ成ガニの標識放流の概要

放流日	放流場所	放流尾数	再捕尾数	再捕率 (%)	最大移動距離 (km)
1984.9.21~10.11	与勝海域	301	35	11.6	21.5
1985.11.5~6	与那城村平安座沖	189	38	20.1	3.5
1987.9.21~22	沖縄市泡瀬沖	189	10	5.3	3.5
“ 10.3~4	海中道路北側	206	76	36.9	3
“ 10.6~7	石川市石川沖	130	25	19.2	6.5

尾の再捕があった。この間の再捕率は36.9%と非常に高かった。再捕までの移動距離は最大3kmで、2km以内のものが多かった。

石川沖放流群も放流翌日から再捕され、11月24日(放流48日後)までに25尾の再捕があった。したがってこの間の再捕率は19.2%であった。移動距離は最大6.5kmであった。

この年の3ヶ所での同時放流では各海域での最大移動距離は3~6.5kmと狭い範囲の移動しかしていなかった。金武湾では中北部を石川漁協が、南部の海中道路沖を与那城漁協がタイワンガザミ漁場として利用しているが、両漁場間の交流は認められなかった。このことからすると両漁協が漁獲対象とする地先群は別のものである可能性が高い。

以上1984年以降に実施した成ガニ標識放流結果の概要を示したが、1984年の放流以外は再捕されるまでの移動距離は短く、行動範囲はそれほど広くない。したがって金武湾、中城湾内で複数の地先群が存在するものと考えられる。

## V 漁業実態

### 1 漁獲量

与那城漁協の1983~87年間のタイワンガザミの年間漁獲量は不漁年の1985年で約4トン、豊漁年の1986年で約10トンで、5か年の平均漁獲量は約7トンであった。月毎の漁獲量を見ると1~6月の間は100~500kgと低いが7月になると増加し600~1,300kgとなる。8月にはやや減少するが9月以降再び増加し500~2,000kgとなる。豊漁であった1986年10月には約4,100kgの水揚げがあった。年間を通してみると7月と10~11月の2回のピークがある(63年度報告:表12)。

### 2 漁獲尾数

市場測定、生物測定、セリ帳集計から与那城漁協のタイワンガザミ漁獲尾数を求めると、198

5年が約26,000尾、1986年が約61,000尾、1987年が約35,000尾であった。

飼育試験、標識放流から得られた成長曲線をもとに甲幅別漁獲尾数から発生群別漁獲尾数を推定すると1~6月までは前年発生群のみが漁獲の対象であり、そのうち1~3月までは前年前期発生群が主体であり、それ以降は前年後期発生群が多くなる。7月になると当年前期発生群が加入し始め9月にはこれが漁獲の主体となる。当年後期発生群は12月に少数漁獲されるのみで漁獲対象となるのは翌年からである(63年度報告:表17)。

また1年間の通算漁獲量を発生群別にみると漁獲の主体は、当年前期発生群と前年後期発生群であることがわかる。

このように、この魚類の発生群別漁獲尾数を推定するに際しては、飼育試験、標識放流から得られた成長曲線をもとに甲幅別漁獲尾数から発生群別漁獲尾数を推定する必要がある。また、この魚類の発生群別漁獲尾数を推定するに際しては、飼育試験、標識放流から得られた成長曲線をもとに甲幅別漁獲尾数から発生群別漁獲尾数を推定する必要がある。

このように、この魚類の発生群別漁獲尾数を推定するに際しては、飼育試験、標識放流から得られた成長曲線をもとに甲幅別漁獲尾数から発生群別漁獲尾数を推定する必要がある。

### 発生群別漁獲尾数の推定

このように、この魚類の発生群別漁獲尾数を推定するに際しては、飼育試験、標識放流から得られた成長曲線をもとに甲幅別漁獲尾数から発生群別漁獲尾数を推定する必要がある。

(注: 発生群別漁獲尾数の推定)

発生群別

このように、この魚類の発生群別漁獲尾数を推定するに際しては、飼育試験、標識放流から得られた成長曲線をもとに甲幅別漁獲尾数から発生群別漁獲尾数を推定する必要がある。